# 「保育所における危機対応」に関する授業の考察
## － 保育学生の感想の分析 －

## A Study on Teaching “Crisis Correspondence in Nursery Schools”

（2014年３月31日受理）

原　田　眞　澄
Masumi Harada

Key words：保育所，危機対応，避難訓練，養成校


## 要　　約

保育士養成における「保育・教育実践演習（幼稚園）」は，保育者となる直前に大学と保育現場をつなぐ目的で展開している。私は「保育所における危機対応」について担当しており，平成25年度に実施した授業では，東日本大震災において園児を無事避難させた保育士の証言（DVD）を教材として使用した。本研究では，より良い授業にすることを目的に，授業終了時に受講により学生が最も強く感じたことを調査した。学生が記述した感想をデータとし，その内容が示す意味ごとにカテゴリー化し分析した。その結果，「災害時はスピード・臨機応変な対応が必要」，「保育士は子どもの命を守る仕事と再確認」，「常に危機対応の方法を確認する構えが必要」・「日頃の訓練が重要」・「本番に備えた訓練こそ重要」というカテゴリーが抽出された。これは授業の到達目標と一致するものであり，実施計画はおおむね肯定できると考えられた。また，「保育士は子どもの命を守る仕事と再確認」というカテゴリーに関しては，他の授業では伝わりにくいものであるのに対し，本授業では多くの学生に伝わったことがわかった。今後は，避難誘導についてはグループワークから演習に変更する必要性も感じたので，改善してより充実した授業につなげていきたいと考える。


## は　じ　め　に

私たちの記憶に新しい東日本大震災は，多くの犠牲者と建造物の損壊などを招く大変悲惨な自然災害であった。これにさかのぼること16年，阪神淡路大震災もまた多くの犠牲者と建造物の損壊，広い範囲におよぶ大火災が発生する出来事であった。私は，東日本大震災の直後に宮城県気仙沼市でボランティア活動をおこなったが，巨大地震や大津波の被害の規模というものが自分の想像をはるかに超えるものであったために，言葉にならない恐怖に襲われたことを忘れることはできない。ただ，３.11の情報量には限りがあり，十分理解できないまま「みんな自分の命を守ることに必死であったろうな」と漠然と捉えていた。その後，時間と共に次第に情報が増えてくると，あの巨大津波のなかにあって一人の死者も出さなかった保育所があったということを知ることができた。

私は，涙が出るほど感動した，あらためて保育士という職業の尊さや，保育士が背負っている責任の重大さを再確認させられた。

私は，その後そうした保育所の避難方法について関心をもち，保育雑誌やDVD，テレビの報道番組などを通して積極的に情報収集してきた。この過程を通じて感じたことは，「保育所は自分で自分の身を守ることができない，あるいはその力が十分でない乳幼児を預かる施設なので，そこで働く保育士には十分な危機管理能力が必要不可欠となる。」ということである。

そこで，私は保育所における危機対応あり方を追究し

つつ，短期大学での保育士養成において最低限どのような教育をなすべきかを考えている。限られた２年間，しかも大変過密なカリキュラムのなかで，何をどのようになすべきか暗中模索している段階といえる。私の願いは，中国短期大学（以下「本学」と称す）の保育学生には，再び巨大地震が発生した場合，東日本大震災の時と同じように一人の死者も出さないで全員無事に保護者の元へお返しできる保育士になってもらいたいということである。

平成25年度に私が担当した授業では，危機管理に関する内容は「健康」（１年次後期）１コマと「子どもの保健演習」（２年次前期）１コマと「保育・教職実践演習（幼稚園）」（２年次後期）１コマでおこなった。その「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業は２年次12月に実施したので，就職を目前に控えた段階の授業であり，危機管理については総まとめの意味合いが大きかった。そこで，今回学生がこの授業内容をどのように受け止めたのか分析し，授業の到達目標が達成できたかどうかについて考察を加え，今後さらなる授業内容の充実に向けていきたいと考える。

## 研　究　目　的

本学における「保育・教職実践演習（幼稚園）」の危機対応の授業の振り返りをおこない，今後の教育内容の充実に向けてどのような方略があるのか多角的に考察することを目的とする。

## 研　究　方　法

日時：平成25年12月５日「保育・教職実践演習（幼稚園）」の危機対応に関する授業時間

場所：本学の教室

内容：授業内容は，以下の通りである。

①災害の種類，②危機管理における緊急連絡

③防災対策と避難訓練，④園児の避難方法についてグループワーク，⑤東日本大震災における避難の実際（DVD）「３.11その時，保育園は　いのちをまもる　いのちをつなぐ」（抜粋）

当該授業を受講して最も強く感じたことを５分間で自由記述してもらい，内容の意味ごとに分類する。

## 研　究　結　果

学生の記述内容は，表１の通りである。

最も多かったのが，「日頃から避難経路を歩いてみるなど，常に災害時に備える必要がある」（43人）で，以下「保育者という職業は，子どもの命が第一ということが改めてわかった」（38人），「日頃から訓練をしておくべきだと感じた」（23人），「本番に備えた訓練でないと意味がないと感じた」（22人），「 臨機応変な対応が重要なポイントになると感じた」（19人）の順であった。

「日頃から避難経路を歩いてみるなど，常に災害時に備える必要があると感じた」（43人）についての具体的な記述には，「事前にルートを確認することによって命を守ることができたので，やらなければいけないではなくていつ何が起きても大丈夫なようにしなければいけないと感じた」「現場に出たらしっかり見て（避難）ルートを確認しておく必要を感じた」「最短ルートで子どもの安全を確保できるような経路をしっかり考えなければならないと思った」「防災マップや避難ルートは指定されたものがあるが，それぱかりがすべて安全ではないことも理解できた」などがあった。これは，DVDのなかで無事に避難できた保育士が，常に避難経路に関心を注ぎ保育所周辺の状況変化の有無を的確に把握し続けてきたという発言に対する反応であった。

「保育者という職業は，子どもの命が第一ということが改めてわかった」（38人）の具体的な記述は，「保育士は子どもの命を預かる仕事だとあらためてわかった」「保育者になるということは，責任をしっかりもって子どもたちをしっかり守らなければいけないとビデオを見て強く思ったので，私も子どもたちを守るのだという気持ちを忘れないようにしていきたい。」などがあった。

「日頃から訓練をしておくべきだと感じた」（23人）と「本番に備えた訓練でないと意味がないと感じた」（22人）が，ほぼ同数であった。「本番に備えた訓練でないと意味がない」についての具体的な記述には，「ただ訓練するのではなく子どもに危機が迫る時，自然と行動できる

表１．授業終了時の感想

| 内　　容 | 人数 |
|---|---|
| 日頃から避難経路を歩いてみるなど、常に災害時に備える必要がある | 43 |
| 保育者という職業は、子どもの命が第一ということが改めてわかった | 38 |
| 日頃から訓練をしておくべきだと感じた | 23 |
| 本番に備えた訓練でないと意味がないと感じた | 22 |
| 臨機応変な対応が重要なポイントになると感じた | 19 |
| 普段の保育のことだけでなく危機管理も考えておかなければならないと感じた | 10 |
| 瞬時に考えて行動する大切さを感じた | 9 |
| ４月からの仕事の責任を感じた | 9 |
| (岡山には災害が少ないから大丈夫なのではなく)危機管理能力を積極的につけていきたい | 9 |
| 自分が（DVDの保育士と）同じように動けるかと不安になった　怖くなった | 8 |
| 保育者同士の共通理解が大切だと感じた | 7 |
| 東日本大震災の時の保育士を尊敬する | 6 |
| 職員同士の連絡（連携）が大切だと感じた | 6 |
| 適切な指示判断が大切だと感じた | 5 |
| 具体的にすべきことがわかった | 5 |
| 人任せではなく自分が助けるという気持ちで動くことが大切だと感じた | 3 |
| 災害時の避難に対する心構えを絶えずもっておく必要を感じた | 3 |
| 自分は危機管理についてまだ考え方が甘いと感じた | 2 |
| どんな時でも冷静に状況把握して対応していくことが大切だと感じた | 2 |
| これからの訓練は、自分の命を守るのではなく子どもに指示する側になることを自覚した | 2 |
| (災害時は）焦らず落ち着いて行動することが大切だと感じた | 2 |
| (DVD の保育士に）保育にかけるぶれない気持ちを感じた | 2 |
| 地域の人たちの協力がとても大切だと感じた | 1 |
| 大きな災害を体験したことがないから危機管理は大事だとは思うが難しいことでもあると感じた | 1 |
| 組織として行動することを頭に入れる | 1 |
| 子どもの命を守ることは本当に大変なことだと感じた | 1 |
| 災害にあった子どもの心のケアも頭に入れておく必要があるとわかった | 1 |
| 何より職員が一丸になって行動することが大切だと感じた | 1 |
| 岡山は災害がないから‥‥、遠くの話だからと他人ごとに思っていた気がした | 1 |
| (災害時は）まず子どもに「大丈夫だよ」と安心させることが大切だと感じた | 1 |

ために大切なものだとわかった。」「適当にやるのではなくしっかりとしておくことが大切だと思った」「もしもの事を想定して訓練することが必要だと思った」「いざ災害が発生したら,不安や恐怖から動けなくなると思う。だからこそ準備や訓練が大切で体が覚えておかなければならないのだということを学んだ」など，DVDのなかで無事に避難できた保育士が異口同音に訓練の通りに避難したことを語っており，これに対する反応であった。このように，多くの学生が，保育士は子どもの命を守る仕事であることを再確認したのと，いつ起こるかわからない危機的状況に的確に対応するには日頃の真剣な訓練が重要であることを感じていた。

そして，実際に災害が発生した場合は「臨機応変な対応が重要なポイントになると感じた」(19人)，「瞬時に考えて行動する大切さを感じた」（９人)，「適切な指示判断が大切」（５人)，「職員同士の連絡（連携）が大切と感じた」（６人)「保育者同士の共通理解が大切である」（７人)など,DVDのなかで無事に避難できた保育士が語った内容から，臨機応変な対応と瞬時の判断が必要だと感じた学生が多かった。災害は予告なしに発生し，対応に求められる緊急度は非常に高い。日頃から職員が共通理解することや，災害発生時職員間で連絡（連携）を十分取り協力することが印象に残っていた。「具体的にすべきことがわかった」（５人)は，よく目立つ赤い旗を振ること，高台へ逃げること，決また避難場所を目指して逃げるなどを上げていた。　以上は，自分が保育士になった時に災害への備えや災害時の対応について具体的に何をすべきかという内容であった。

このほか保育士として自分自身が背負う役割について，「４月からの仕事の責任を感じた」（８人)，「これからの訓練は，自分の命を守るのではなく子どもに指示する側になることを自覚した」（２人)，「普段の保育のことだけでなく危機管理も考えておかなければならない」(10人)など重責を再確認した学生がいる一方で，「自分が（DVDの保育士と）同じように動けるかと不安になった　怖くなった」（９人)と不安の方が先に立つ学生もいた。

また，東日本大震災のことを「岡山は災害が少ないから，遠くの話だから他人ごとのように思っていた気がした」や，「大きな災害を体験したことがないから危機管理は大事だと思うが難しいことでもあると感じた」という内容もあり，温暖な気候，災害の少ない岡山の地域性をうかがわせる内容もあった。

以上より，記述内容がもつ意味を判断してカテゴリー化すると図1のようになった。円の大きさは記述数が多

いか少ないかを表している。下から上へ矢印でつないでいるように，保育士の役割意識を基盤として，普段の保育において災害発生時に備えるポイント，そして災害が発生した場合の避難のポイントという関係になっていた。

授業では，一般的な危機対応のポイントを説明後に東日本大震災に遭遇した保育士の報告(DVD)を視聴したが，この内容の大半がDVDで語られたものであった。

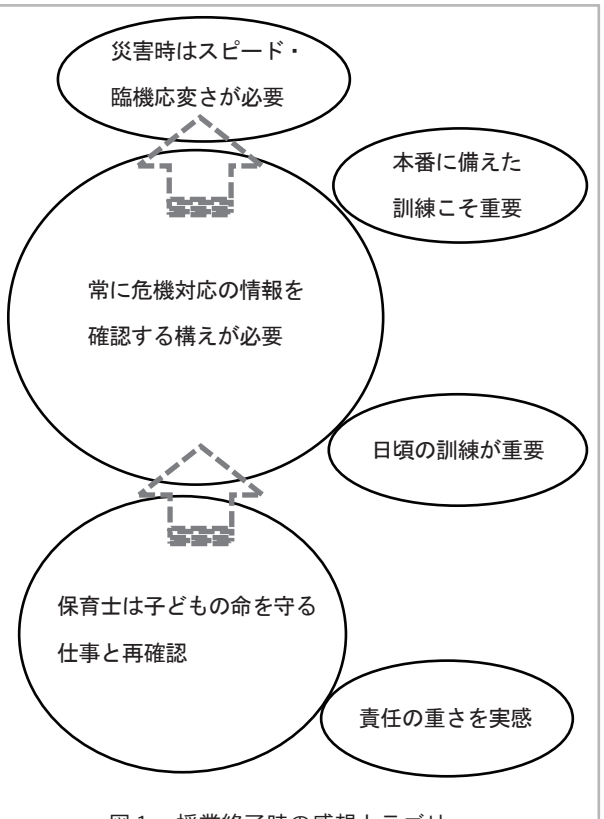


図１．授業終了時の感想カテゴリー

## 考　　察

「保育・教職実践演習(幼稚園)」の授業計画15回のなかで，整理精選された内容のひとつがこの「危機管理」である。この危機とは，天災人災を問わずまた事の大小を問わず多岐にわたるのは言うまでもない。浅井8)は，「最も深刻な危機は子どものいのちにかかわる事態であり，危機対応の際にまず大切にすべきことは，子どものいのちを守ることである。」と述べている。

保育士が預かる０歳から６歳までの乳幼児は，すべての面において発達途上にあり，とくに危機に対応する能力は乏しい。したがって，保護者がいない保育中は，保育士が保護者になりかわって「子どもの命を守る」ことが重要な役割である。多くの方は，これを当然のことだと感じておられるであろう。しかし，私は保育士養成に携わって16年経つが，これを保育学生に伝える事はできても，理解してもらう事は相当難しいと痛感している。もしかすると，私が看護師養成をしていた頃の看護学生と比較しているからかもしれない。職業の役割として，対象者つまり園児の「命を守る」ことを明確に意識するまでに変容すること，それを到達点とした授業の構築は試行錯誤の段階と感じている。

そのため，この「危機管理」の授業を計画する際も，どのような危機をテーマにすればよいか迷い，慎重に検討を重ねた。子どもの危機をイメージする際，一番に思い浮かぶのは大阪教育大学付属池田小学校無差別殺人事件であった。これは，教育中に発生した不審者侵入という人的災害である。この事件以降，保育所では不審者侵入の予防と避難訓練が徹底されていて，学生に提示する事例として候補の一つにあげていた。また，火災･洪水･地震のような災害や，保育中の怪我や園外に出向いた時の交通事故などどれも少なからず発生するもので，考えれば考えるほどあれもこれも盛り込みたい衝動にかられた。しかし，最終的には，東日本大震災の甚大な被害のなかでひとりの死者も出さずに避難できた保育所こそ，何よりも自分自身納得がいく事例だと確信した。私には，3.11の半年後に震災ボランティアに行った経験があり，その甚大な被害を直に見て知っていたからである。池田小学校の事例から学ぶことはたくさんあると感じてはいたが，保育学生にとってはやはり保育所の事例のほうがはるかに身近に感じられること，何より失敗事例でなく成功事例のほうが行動レベルに直結しやすく危機対応のモデルに適していると判断した。そこで，この授業では危機を地震と津波に絞ったのである。

授業時間は90分間と限られていたので，前半に危機対応のアウトラインについてレディネスを確認し，後半は園児を避難誘導する方法について具体的に検討するグループワークと東日本大震災の体験談(DVD)の視聴と計画した。危機対応のアウトラインについては，パワーポイントとプリント資料で確認した。私が担当した授業だけでも過去２回の授業をしているが，かなりの時間が経

過したため，記憶にない学生が多かった。これについては，実際に勤務するようになれば実践と共に理解できると考えた。結果を見ても，復習内容に関する者は少なかった。

後半のグループワークは数人ずつで行ったが，100名を超える学生数ということもあり，取り組みの真剣さには大きな開きがあった。ただ，意見を発表したグループは，子どもの特性に配慮しつつ集団をまとめて誘導できる方法を述べていて，他の学生には良い刺激となったようである。学生の頭に具体的な方法が浮かぶかどうかは，保育所・幼稚園・施設と３つの実習やボランティア経験で実際の避難誘導を見聞きしたかどうかが大きく反映されていると感じた。本来の計画では，学生に保育士役と園児役に分かれてもらい教室から中庭まで避難する演習を考えていたが，当日の教室が急遽4階に変更して距離が伸びたため時間的に無理が生じ中止した。やはり，学生への教育効果を考慮するとやはり体験レベルの方が望ましかったと思う。

学生のなかには，実際の避難誘導の方法が最も印象に残ったという者が10名程度いた。これはパワーポイントの画像と私が作成して提示した実物に対する反応だと考えるが，この時期の学生の大半はすでに就職先から内定をもらっていて，避難誘導するのは自分だという意識が芽生えていることも要因のひとつではないかと考える。

図１のカテゴリーを見ると，「危機対応のポイントがスピードと臨機応変な対応」だということを最も多くの学生が感じていたことになる。逆をいえば，これまでは危機対応を時間軸で感じとっていなかったのかもしれない。DVDのなかで保育士は，３.11の避難で予定していた道が寸断していたら崖を登ってでも逃げて，一刻を争い少しでも早く高台にたどり着くよう機転を利かせていた。たとえ訓練では予測していなかった事が次々に起こっても，その都度瞬時に判断して切り抜けていた。「早く早く」と連呼する様子，走って必死になって子どもを守る様子を視聴して，危機から逃れるため無事に避難するためにはスピードが重要な鍵を握ることを強く感じとってくれたのではないだろうか。もしかすると，私がこれを代弁して伝えても同じような結果にはならなかったかもしれない。やはり，実際に体験したことを当事者である保育士から聞くことが，今回は重要なポイントであったと思われる。

そして，DVDのなかで若い保育士が，「学生の頃，保育士は子どもの命を預かる仕事だと習ったが，怪我や病気の手当のことだろうと思っていた。でも，（今回の事で）こういうことだったのだと感じた。」と明かしている。これは，まさに私が16年間試行錯誤してきた課題に対する答であるが，実にあっさりと学生の心にしみわたらせてくれたものである。図１のカテゴリーにも「保育士は子どもの命を守ることと再確認」とあるが，学生の感想のなかでは2番目に多かった。この要因を考えた時，どの保育士の証言も関係していると思われたが，なかでもひときわこの若い保育士の証言が大きく関係しているように思われる。とにかくDVDから自分の命をなげうって子どもの命を守ろうとする気持ちの強さや必死さが伝わり，遠く離れた東北の出来事であったのに目の前に情景が浮かぶほどの臨場感を体験できたのであろう。授業を受けている学生全員が，集中して視聴し大きな感動を覚えていた。天野ら6)のDVDが教材として活用できた効果は大きく，大変多くのメッセージが伝わったと感じる。ただし，「保育士は子どもの命を守ることと再確認」したことが，二次的にしっかり頑張ろうといく意欲につながるか，今の自分にはできないのではないかという不安つながるかは二通りあった。どちらの学生も率直な感想であるが，不安を感じていた学生には記述用紙に不安を軽減するようなコメントを書きフォローアップを工夫しておいた。

最後に，図１のカテゴリーで最も大きいのが，「常に危機対応の方法を確認する構えが必要」であった。これに付随するように，「日頃の訓練が重要」「本番に備えた訓練こそ重要」があった。本授業内容に，防災教育や避難訓練や危機対応の命令指示系統などを網羅したが，備えあれば憂いなしということであろう。現段階では，保育士として働いても自分の知識や技術だけで園児の安全は守れないと感じる一方で，だからこそ自分も園児も一回ごとの訓練を真剣に一生懸命やる必要をひしひしと感じたのではないだろうか。実際に大きな危機が迫ると，人はパニック状態になりやすい。そうした場合にも，的確な指示を出す人＝リーダーがいなければ安全に避難することはできないといわれている。学生は，ボランティアや実習で保育者として避難訓練をしていれば別だが，

これまで避難誘導される側の経験しかもっていないわけである。それと比べると保育士として避難誘導するという責任は重大である。訓練に対する考え方がこの授業で大きく変わったのは，保育士になるという自覚が学生の心に芽生えたことを意味しているのではないだろうか。

大泉[1)]は，日本人の国民性と危機意識について，自己防衛（セルフ・ディフェンス）意識＝危機意識が欠けている理由を6つ上げている。①いざとなったら「誰かが助けてくれる」という他力本願的な考えが強い。②危険に対する想像力が働かない，そして想像力に乏しい。③のどもと過ぎれば熱さ（事故・事件・災害など）も忘れる国民性。④「最悪の事態に備えることができない。⑤疑う目をもてない。⑥自分の生き方を「運命論」で片づけてしまう。保育士は，このなかでとくに①の意識をコントロールする必要性を痛感する。もちろん，たった一人で避難誘導するわけではないので，職員間で連携や連絡を十分とり協力するなかで「自分が子どもを守る主体である」という意識を強くもつべきだと考える。その意識があればこそ避難訓練を確実に行うこと，本番にミスは許されないので避難訓練は真剣におこなうこと，常に避難経路を確認することにつながっていくのではないだろうか。

以上を総合的に考慮して，私が本授業で学生に伝えたかった事はほぼ伝わったと考える。本学のような短期大学では保育士を２年間で養成する場合，内容量との兼ね合いで過密なカリキュラムを回避できないのが現状といえる。したがって，内容の整理精選や方略の工夫が必要となってくる。しかしながら，実際には十分な検討がなされないままに，３年前から「保育・教職実践演習(幼稚園)」という教科目が増設となってしまった。ますます過密になるカリキュラム，ましてやこの授業担当者になることに私自身は正直少なからず後ろ向きな気持ちであった。今，そういった経緯を思い返しながら今回の研究結果をみると，この結果は自分自身に大きな力を与え過去の気持ちを払拭してくれたように思える。学生には素直な感性があり，DVDから伝わる危機管理のポイントを的確にとらえてくれていたことを強く感じる。

この「保育・教職実践演習(幼稚園)」が大学教育と保育の現場をつなぐ架け橋となり，就職してからの活動の一助になればと願いながら，さらによりよい授業内容にしていきたいと考える。そのための改善点の一つが，演習部分である。避難誘導をどのように体験するのか，体験後学生へのフィードバックをどうするのかなどについて引き続き検討していきたい。

そして，将来的には岡山県内の保育所で実施されている避難訓練や，実際にあった自然災害とその対応などについての聞き取り調査をおこない，身近なエリアでの成功事例についても学生に伝えていきたいと考える。

## 参考・引用文献

１．大泉光一：子どもを守る危機管理術，創成社，2011
２．OECD編，立田慶裕監訳，安藤友紀訳：学校の安全と危機管理―世界の事例と教訓に学ぶ，明石書店，2005
３．田中哲郎:保育園における事故防止と危機管理マニュアル改訂第四版，日本小児医事出版社，2008
４．齋藤公男：日本の災害と防災科学変貌する災害のすがたと防災科学技術，岡山日日新聞社，1989
５．国会資料編纂会：日本防災百年史，行政通信社，1990
６．天野珠路監：3.11その時，保育園は　いのちをまもる　いのちをつなぐ，岩波映像（DVD）
７．原田眞澄：東日本大震災における保育士の対応に関する文献検討，中国学園紀要第11号，p13 ～ p18
８．浅井春夫：児童福祉施設・保育所子どもの危機対応マニュアル，建帛社，2009，ｐ9
９．天野珠路監：希望をささえる　3.11その時，保育園は“続編”，岩波映像，2013（DVD）